パンデミック２

京谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンデミック２

【Ｎコード】
Ｎ０４８５Ｚ

【作者名】
京谷

【あらすじ】
京谷がカーテンを開けると辺りはまるでゲームの世界へと変貌していた。
響き渡る悲鳴、燃え盛る車両。
そんな中で一人の襲われている人を発見し、必死に助けようとするが・・・

救出（前書き）

前回大変大きなミスを犯しました。
本来なら連載ものにするつもりが、短編ものとして投稿してしまいました。
申し訳ありません。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０４７８ｚ／
前作（第一話に当たるものです）のＵＲＬです。

救出

彼はこんな異常事態が起きているというのに口元に笑みを浮かべていた。

（や・・・やべ。楽しくなってきた！）

あれからしばらく奴の体中をバットで殴っていたが、奴は根気よく何度も立ち上がってくる。

（まさか人を堂々と殴れる日が来るなんてよ・・・楽しくなっちゃうよなぁ！）

ゴッ！

頭にフルスイングがヒットした。

ドサ

「あ！」

バットで小突いてみたが、もう立ち上がることはない。

（死なない訳じゃないのか。）

「どうすんだよ・・・」

（襲いかかっていたからといって、殺すのはまずいよなぁ・・・）

そこで事態は急変した。

「おいあんた！ゴフッゴホ」

「ん？」

襲われていたやつだ。

「こいつらを殺すことに躊躇なんていらない！ゴホッゴホッ」

（何言ってんだこいつ・・・）

「こいつらはもう俺たち人間とは違うんだ！」

「はぁ？」

「何が起こったのか、俺も詳しくは知らんが、とにかく奴等は俺たちとは違うんだ！」

「信じろと？」

「あいつらの異常さは殴って殺したあんたが一番よくわかっているだろう！ゴホッガフッ」

（確かにそうか。）

「まぁとりあえずあんたを助けるよ。」

「駄目だ・・・俺は噛まれた。」

「何ゲームみたいなこと言ってんだよ！確かに血はかなり出てるが意識もしっかりして・・・」

「俺もあと何分かしたらさっきの奴みたいになる。」

「！」

「まさか本当にゲームみたいなことが・・・」

「たぶんな。俺は見たんだ・・・噛まれた奴がどうなるかを。」

「だからってよぉ！」

「いいからいけ・・・あんたみたいな勇気のある奴を待ってる人はまだいるはずだ！」

「くそ！本当に助ける方法はないのか？」

「ない。ゴフッゴフッ」

「わかったらささっと行け！俺が奴らみたいになる前に・・・」

「・・・・・・・わかった。」

「それでいいんだ。」

あれから京谷は一度家に帰って、身支度を整えることにした。

「やっと着いた。」

（家に帰ってくる途中はあまり「アレ」は見かけなかったなぁ。）

「まずは飲料水か。次は食糧だろ。後は・・・・・」

家にある使えそうなものはとりあえずカバンに入れた。
武器はバットのままである。

「とりあえずこんなもんか。」

（あとは・・・）

「母さん行ってくるよ。精々おれが死なないよう上から祈っていてくれ。」

京谷は和室の仏壇の前で手を合わせる。
母は一年前に他界した。
不慮の事故であった。

（今はしんみりしている暇なんてないか・・・）

「よしいくか！」

ガチャ
家のドアを開けたら数メートル先に「アレ」がいた。

（ッ！！）

あまりの驚きに声も出せないまま硬直してしまった。

（・・・・・アレ？襲ってこない？）

「まさか見えてないのか？」

試しに玄関にあった靴べらを道路のほうへ投げてみた。

コツン・・・

小さな音が鳴った。

その瞬間目の前にいた「アレ」はゆっくりと体の向きを変え、道路のほうへ向かっていった。

（やっぱりそうなのか！）

「これでいちいち殴らなくても進める！」

声を出しすぎた。
道路へ向かって行っていた「アレ」がまた戻ってきた。

「ッチ！」

ゴァン

ドサ

一発K．Oだ。

（まだ数が少ないからいいが都市部へ行くともっといるんだろうなぁ）

「さて気を取り直して行きますかぁ。」

そう言って京谷は家を後にした。

救出（後書き）

今回最後まで見てくださった方々、ありがとうございます！そしてお疲れ様です。
とても読みずらかったと思います。
これから回数を重ねることでうまくなっていくことを自分に期待しています・・・
しかしこんなめんどくさい文を最後まで見てくださったあなたは相当忍耐力がありますね＾＾
その忍耐力を生かしてこれからも僕の作品につきあってもらえればなぁ～と思う次第です。

出会い（前書き）

とてもよ見ずらいかもしれませんが、どうかお付き合い下さい＾＾；

出会い

家を出てから早いことにもう一時間が過ぎた。

「誰もいねぇじゃん・・・」

自分の家の周りや、商店街なども言ってみたが、皆避難したのか「人」はまるで見当たらなかった。

「皆「アレ」になっちまったのかよ!?」

商店街を埋め尽くすのは「アレ」の群ればかり。
助けをほしがっている人なんてだれ一人見当たらなかった。

(場所を変えるか・・・)

「ちょっと街に近づいたほうがいいのかなぁ。」

(街に近づけば人もいるだろうがそれは「アレ」が増えることも意味するんだよなぁ)

「はぁ〜」

「今日はゆっくり昼寝して夜を迎えようと思っていたのによ！」

また、声を出しすぎてしまった。

（あ・・ヤベ・・・・）

「ウウウウウウウウウウ」

「くそッ」

（また走るか！）

と思った時だった。

遠くから一際大きな叫び声が届いた。

「ちょっと！だれかいないのー？変態が溢れてるんだけど。」

（馬鹿かあいつ！あんな大声出しやがって！）

「ちょっと待ってろーー！今行くぜ。」

女子を馬鹿にしながら自分も大声を出す馬鹿な京谷である。

「わ！？ちょっとあんた何？バットなんか持って。」

「お前周りの状況が見えてねぇのかよ！？」

「変態が増えただけでしょ？」

「・・・・・・・・・・」

「なによ。」

「お前・・・馬鹿だろ。」

「ッ！？」

「ちょ・・ちょっと！初対面の女子に向かってバカって・・・あんたこそ馬鹿じゃない？」

「はあ！？俺はお前ほど馬鹿じゃ・・・」

「ウウウウウウウウウ」

（やべ！忘れてた。）

「おい！茶番はいいからとにかく逃げるぞ！」

「茶番って・・・ちょ・・ちょっとどこいくのよ？」

「聞こえてなかったのか馬鹿が、逃げるんだよ」

「馬鹿ってッ！・・・まぁあいいわ。で何所に逃げんのよ」

「とにかく走る。」

「あんたやっぱ馬鹿でしょ。」

「うるせぇ！いいからいくぞ！」

「ちょ・・ちょっと待ってよ！」

こうして京谷と馬鹿（名前教えてもらってないので）は一時的にチームを組むことになった

出会い（後書き）

今回も読んでくださった勇者の皆様、ありがとうございます。
今日はあまり書くことがないのでここら辺で失礼いたします。
お疲れ様でした。

頼れるものはない（前書き）

お気に入り登録ありがとです＾＾
次もできるだけ早く投稿したいとおまっておりますので、よろしくお願いします

頼れるものはない

「「はぁはぁはぁはぁ」」

どれくらい走ったんだろう？

辺りの景色は普段あまり見ないものへと変わっていた。

「ここはどこなんだ？」

「確かこの近くには警察署があったはずよ！」

「お前詳しいな。」

「趣味が散歩なの。この街の地理はまかせてよ。」

「へぇ～」

（ただのバカじゃないのか）

「そういやお前名前は？」

「山岡美咲」

「俺は笹塚京谷だ。」

「でこれからどうするんだっけ？」

「さっきも言ったけどここの近くには警察署があるの。」

「で？」

「でって・・助けを求めるにきまってるでしょ！」

「この急な異常事態に警察が俺たちをわざわざかくまってくれるとは思えんが・・・」

「だ・・だって市民の安全を守るのが警察でしょ！なら・・・・」

「わかった。じゃあ一度行ってみよう。ただ受け入れを拒否されたら次は俺の指示に従ってもらうからな。」

「わかったわ。」

「じゃあ早速行きましょう！」

結果は京谷の予想道理だった。
警察の方も迷っていたみたいだが、やはりこれ以上不安因子は増やしたくなかったらしい。
実に大人の対応だ、と思ったがやってくる「アレ」に向かって無駄に弾を打ち続けている様は少し残念だった。

「だから言ったろ。警察だって俺たちと同じで自分の身を守るのがやっとなんだ。」

「・・・・・・・」

「まぁいい。とにかくさっき言ったとおり次は俺の言ったところに行くからな！」

「わかってるわよ！」
「で、どこに行きたいの？」

「ホームセンターだ。」

「なんで？」

「なんでって、武器の山だろ。ホームセンターって」

「あんな材木と工具とかばっかりの場所にいってどうすんのよ？」

「武器を作るんだよ。バットだけじゃ心細いからな。」

「作るってあんたねぇ、子供の工作じゃないのよ？武器を作るってことは。」

「いざとなったらチェンソーでも持ち出すよ。」

「いいから早く行くぞ。もうそろそろ日も暮れてくるだろう。早めにいって今日の寝床も確保するぞ！」

「寝床ってあんた、野宿でもするつもり？」

「いざとなったらな。」

「私は帰るわよ。お風呂だって入りたいし。」

「我がまま言うなよ。こんな状況でいちいち家に帰ってられるかってんだ。」

「だからって野宿しろっていうの？」

「わかった。お前は高級な寝袋に入れてやるから勘弁してくれ。あと野宿すると決まったわけじゃないから。」

「私がそんなもので釣られるとでも？っておい聞けよ！わかったわよ。わかりました！ついていきますよ！どうせ家にはだれもいないし。」

「そうと決まれば急ぐぞ。日暮は近いからな。」

「ホームセンターならここから近い所に大きいやつが一つあるわ。そこに行きましょう。」

「おう！」

そうして京谷と美咲は歩き出した。

頼れるものはない（後書き）

読んでくださった方本当にありがとうございます。
なんていうか自分の作品が読まれているという喜びと、自分の作品なんかを皆さんに見せてしまってもいいのか？という気持ちが最近芽生えてきました。
できるだけ皆さんにお見せするのはいいものを出したいのですが、自分は言語力があまりないので「なんだこれ？」と思う方もいるかもしれません。
ですがそこはどうか我慢してみてもらえたら光栄です。
なんか視聴者の方に我慢しろだなんて偉そうですね＾＾；
やっぱり僕にはこっちの方が性に合っているようです。
ということで、見てくださった方本当にありがとうございました！

希望（前書き）

毎度毎度見ずらい文で申し訳ありません。
謝る割には進歩しねぇなと思ってる方も多々いることでしょう。
本当にすみません・・・・・
ですが！どうかこれからも僕の作品につき合ってください！
よろしくお願いします！

希望

あれからじばらく歩いていたが、だんだんと「アレ」が増えてきている気がする。
時間とともに噛まれた人が増えていったのだろう。
または、自分たちが都市部に近付いているのかもしれない。

「あれよ。」

「確かにでかいなぁ・・・」

「この街一番だからね。」

「とりあえず入るか。」

「ええ。」

中はとても広く、物も沢山あった。
材木、工具、観葉植物、隅の方にはスナック菓子や少量の飲料水、
その他いろいろなものがあった。
ただ、明らかにおかしなところがある。
それは客と店員がいないということだ。
たぶん逃げ出したか「アレ」になって音のする方へ向かったのだろ

う。

「中もすごいんだなぁ。なんでもあるんじゃねぇか？」

「そうね。じゃ早速使えそうなものでも集めましょう。」

「じゃあ手分けしよう。おれは右からぐるっと回って使えそうなやつを持ってくる。」

「わかったわ。ただなんか護身用の武器とかがほしいんだけど・・・」

「あ、そうか。じゃあこれを持って行け。」

京谷はバットを渡す。

「ありがとう。でもあんたは？」

「そこら辺から適当に拾ってくよ」

「そう」

「じゃあ行きますか！」

「うん！」

二人揃って買い物かご押して自動ドアをくぐり左右に別れた。

京谷は品を眺め、

（まずは適当に使えそうなものは全部持ってくか）

と考えていた。

その頃美咲は・・・

「あー！これ超いいじゃん！！」

と言いつつ手に取った鉄パイプの近くには

「あくまでも工業用ですので、振り回して遊ばないでください。」

と看板が立ててある。

「今じゃ鉄パイプも生き残るための道具なんだよね・・・」

それからしばらく経ち二人は合流した。

「俺はとにかくたくさん持ってきた。」

「私は殴ることに使えるやつばっかりよ。」

ここから選別が始まった。
まずは自分の身を守れるものから選んでいった。
肘・膝に付けるプロテクター。以外にこういうものもあるもんだ。
あとグローブ。普通のバッティングのときなどに使うものだ。
思いっきりバットを振っても手から滑り落ちることは無くなるので、
無いよりはいいだろう。

「ホームセンターってすごいな。」

「え・・ええ。そうね、私もびっくりしたわ。」

次は勿論武器だ。
バットはポリプロピレンをカーボンブラックで覆っているバットに
変更した。
ちなみにポリプロピレンとは、プラスチックの中では強度が高く、
水に浮かぶほど軽く対熱性にも優れたプラスチックである。
あと鉄パイプにバレーなどで使うテーピングを巻いたもの。
最後にチェンソーだ。

「バットや鉄パイプならまだ分かるけど、あんたチェンソーなんて扱えんの？」

「説明書とかあるだろ」

「これって展示品でしょ？説明書は付いてくるのは倉庫にある箱付きじゃなきゃないわよ！」

「大体はこんな感じだろ？」

京谷はチェンソーの近くに置いておいたあった農機具用っと書いてある燃料をタンクに入れ始めた。

「ちょ・・ちょっと！？大丈夫なの？」

「確か大丈夫だ。あとは・・・」

今度はさっき開けたタンクじゃない方の蓋を開け、チェンソーオイルと書かれたものを入れた。
そのあと何か細々と操作した後に

「これでいいはずだッ！」

と言って京谷は思いっきりスタートハンドルを引いた。
すると、

ポン、ポン

と軽い爆発みたいな音が鳴った。
また京谷が細々とした操作をしたら、ゆっくりとチェンソーの刃が動き始めた。

「よし！」

「あんた何で知ってんの！？」

「昔親父から教えてもらったんだ。」

「あんたの親はアウトドア好きなの？」

「親父が自衛官なんだ。」

「はぁ！？」

「なら助けを求めればいいじゃない！」

「できたらやってるよ。」

「？」

「親父が所属してるのはＯＯＯ駐屯地で、ここからかなり離れているんだ。」

「なら電話してきてもらえばいいじゃない！」

「この状況がここだけってわけじゃいんだ。さっき店にあったテレビで流されてた映像を見る限りこれは世界規模らしい・・・」

「そんな・・・」

「だからきっと親父も今頃対応に大忙しだと思う。だからどっちにしろ俺達は自分たちの力で生き残らなければならないんだ。」

「・・・・・」

「わかったら準備しろ。さっさとでるぞ。戦いは避けたが店の中にも数匹「アレ」がいる。」

「今度はどこに行くのよ。」

「移動手段として車を手に入れたいんだ。」

「盗むの？」

「もう俺たちは盗みをやったんだ。今更なんだ？」

「いや車は鍵が掛ってる可能性があるじゃない？そういう時はどうするの？」

「だから俺たちが次に行く場所は鍵も一緒に手に入る場所だ。」

「どこよ？」

「車販売店だ。」

「その手があったわね。」

「普通盗むより早く車販売店に行くことを考えないか？まぁこれからやるのは結局盗みなんだがな・・・」

「ここから近いのは中古車販売店ね。」

「お！運が良ければ大人数乗れる車両が手に入るかもしれないな。」

「じゃ行きましょうか。もう日も暮れるし。」

「そうだな。」

「てか結局武器作りはやらなかったわね。」

「あ・・わすれてた・・・」

こうして京谷と美咲は新たな装備も手にいれ次の目的地へ向かうのであった。

日暮れまであと二時間三十分

希望（後書き）

読んでくださった方々ありがとうございました！

絶望と希望と絶望

京谷はチェンソーを振り回していた。

「いったいどこから出てきたのよ！」

「元から居たんだろ！俺たちが音を立てすぎたんだ！」

「早くここからでないと日が暮れちゃうわ！」

「分かってる！」

数分前　京谷たちがホームセンターから出ようと出口に向かったらそこには「アレ」が居て、出口をふさいでいた。
どこから出てきたかは分らないが壁を作れるくらいの数はいた。
その壁に京谷はチェンソーを食い込ませる。

ヴィィィングジャグジャグジャボトボト
チェンソーの音と肉が裂ける音、肉が地面に落ちる音がした。

「よしこれならいける！」

ヴィィィィ・・・・・

（刃の回転速度が落ちてる！）

「くそ！チェーンオイルが少なくなってきたか！」

さらに追い打ちをかけるように刃の間に血脂や肉、骨の破片などがたまっていく。

「こいつはもうだめか！ならば・・・」

京谷は新しくなったバットを手に取る。

「美咲！バットだけじゃ一人で戦えない！手伝ってくれ！」

「うん！」

ブォン！ゴォンッベゴッ

（さっきみたくはいかないがこれならいける！）

「ウウオオオウ！」

「ッ！？は・・・はなして・・・」

「美咲ッ！」

（くそッ！これじゃあ間に合わねぇ！）

ッタァン！

ドチャ

「美咲！」

「だ・・大丈夫。それより一体誰が？」

「君たちの援護をする！」
聞きなれない声がした。

「あんたは誰だ！？」

「警官だ！名前は加藤。」

「なぜここへ！？」

「近くの警察署で籠城してたんだが、あそこは奴らに占領されたんだ！」

（美咲が言ってた警察署か・・・）

「だがなぜここへ？」

「ここなら使えるものがたくさんあると思ってな！」

「一応銃と弾はもてる限り持ってきたんだが、弾はいずれ切れるからね」

確かにその通りだ。

「ちょっと！二人とも話してないでさっさと準備してまだ来てるわ！」

「じゃあ加藤さん！援護は頼みました！」

「ああ！任せてくれ！」

ッタァン　ゴォガ！　ドゴッ！

ッタァン　ッタァンッタァン！

「はぁはぁ・・あと少しね。」

「ああ。そうだな。」

「もうひと踏ん張りだ！」

ッタァン　ッガ！　・・・・・・

「お・・終わったか。」

「そうみたいね。」

「よかった。結構弾も使ったからね。」

「ありがとうございました。」

京谷はお礼をするため振り返った。

（なんだ・・・加藤さんの後ろになんかいないか！？）

「ッ！！加藤さん危ない！」

「？？」

京谷たちは不運なことに遠距離武器を持っていなかった。

「アァァァァァァァ・・・」

「加藤さんぁぁん！」

京谷は走ったがバットを思いっきり振って「アレ」を離そうとすると、
どうしても加藤さんが邪魔になる。

グチャ・・・

加藤さんが首を噛まれて倒れこんだ。
その瞬間に襲ってきたやつの頭にフルスイングを叩き込んだ。

「加藤さん！」

「銃を持った大人が真っ先に死ぬなんて、馬鹿みたいだな・・・」

「ッチ！」

「なぁに俺だって噛まれた奴がどうなるかぐらい知ってるさ・・・
仲間の死にざまを見てきたんだからな・・・」

「・・・・」

「そんな顔しないでくれ・・・援護した甲斐がないじゃないか・・・
」

「大丈夫けじめは自分でつける・・・少し目をそむけていてくれ・・
・」

すぅーはぁー
深呼吸の音が静かな店内に響く。

ッタァン・・・

「・・・・」

「持てるものを持ってくぞ。美咲。」

「うん。」

「大丈夫か？」

「徐々に慣れていくようにするわ・・・」

「そうか・・」

それからは無言で加藤さんの所持品を漁った。
手に入れたのは五発まで弾を装填できる拳銃を三つと弾を十五発くらいだ。
後はどこの鍵かもわからない鍵だ。
たぶん加藤さんたちが籠っていた警察署で付き合える鍵だろう。

「銃はできるだけ使うな。音もでかいし、素人の俺たちじゃ遠くから頭へ当てるのは難しいだろう。」

「いざという時にっていうわけね。」

「ああ」

「じゃ・・じゃあ行きましょう。中古車売り場へ」

「案内は頼んだ。」

ようやく本来の目的に向かって進み始めた京谷たちは
ホームセンターを後にした・・・

つかの間の休憩

「おい。いつになったら着くんだ？もう日が暮れちゃうぜ。」

「わかってるわよ！これでも近道使ってる方なんだから！」

ホームセンターを出てからもう二十分位経っていた。
美咲が近道を使ってくれているおかげか大通りとかよりは
「アレ」はあまり見なかったが、それでも一匹や二匹はやはりいた。
だがこいつらは無駄な音を出さなければ襲ってこない。
楽なもんだ。

しかし状況は変わった。
美咲が大声で「わかってるわよ！これでも・・・・」と叫んだから
だ。
しかも「アレ」の聴力がとてもよかったのか、美咲の声がすごかっ
たのかはわからないが、
大通りの方からも敵が迫ってきていた。

「お前なぁ・・・」

「しょうがないでしょ！あんたが馬鹿にするから熱くなっちゃたの
よ！」

「おれは馬鹿にしてない。あとそれ以上馬鹿でかい声を出すな。」

「あんたねぇ！」

「お前のそのでかい声があれば「アレ」の鼓膜もぶち破れるんじゃないか？」

「ッ！？」

「わかった、わかった。俺が悪かったよ。だからそれ以上大声出すな。」

「わかったわよ。」

「とりあえずこの状況をどうにかするぞ。」

「ええ。でもどうやって・・・」

いま自分たちがいるのは周りをコンクリートの壁に囲まれた一本道。
前と後ろからは「アレ」が迫ってきている。
残された道はただ一つ。

「壁を登るぞ。」

「わかった！」

初めに壁を登ったのは京谷。次に美咲だ。
だが、美咲が登り始めた時にはもう「アレ」が美咲に向って手を伸ばしていた。

「美咲早くしろ！」

「わかってるけどッ！足をつかまれちゃったの！」

（まずい！！！）

京谷はポケットをあさる。
ポケットから出てきたのは夕日に晒されて黒光りする拳銃だ。

（この距離なら！）

「美咲ちょっと我慢しろ！」

「え！？」

ッダァン！

ズチャァ

ドサッ

腕に軽い衝撃が走る。
あたりに火薬っぽい臭いが漂う。
これが硝煙の臭いというものだろう。

「ッ！？」

「すまない。これしかなかったんだ。」

「え・・ええ別にいいわ。まだ耳がキーンってなってるけど怪我はないわ。」

「さぁ掴まれ！次のやつがもう迫ってる！」

「うん！」

こうして京谷たちは難を逃れた。
降りたところは二階建ての民家だった。

「ねぇ？今日はここで睡眠をとらない？」

「住んでる人が籠城してるかもしれないぞ。」

「ちょっと見てくるわ。」

「俺も行くよ。」

外から居間を覗き込む。
中にはだれもいない。
今度は玄関にまわってドアノブに手をかけた。

ガチャッ

「開いた！」

「じゃあ入るか。」

中は綺麗で、「アレ」に押し入られた形跡はない。
京谷たちはドアの鍵を閉めて部屋を探り始めた。

「まずは安全の確保だな。」

「まずは二階からいきましょう。」

二階の安全は確保できた。
二階は子供部屋だったんだろう、明日（月曜日）に向けて宿題などをやっていた形跡がある。

「ほんの数時間前まで普通の一日だったのに・・・どうして」

「そうだな。」

「だが今は悲しんでいる暇なんてない。まずは安全を確保して今日を生き残ることに集中するんだ。」

「わかったわ。じゃあ下の階も見に行きましょう。」

「ああ。」

一階も安全だった。

「窓の近くにテーブルとかを寄せて強化しとこう。」

「そうね。夜はどうしても無防備になるからね。」

かれこれ三十分近くもかけて窓の周りに物を置いた。（二階からも物を運んだからこんなにかかった。）

「じゃあ風呂でも入りながら服を洗濯するか。」

「洗濯してる間は何着ればいいの？」

「そこら辺にあるものでも着てればいいだろ。」

「う・・・うん」

（洗濯機の音でやつらが寄ってきたりしないよなぁ・・）

と思いつつも洗濯を始めた。

「先に入っててていいぞ。俺は見張っとくからよ。あとバリケードがちゃんとしてるかチェックとかもしなきゃだめだしな。」

「じゃあお先に・・」

（ついでに布団でも準備しとくか）

「確か予備の布団は二階にあったんだよな。」

階段を上る。
なんか足音が多い気がする。しかも足音が聞こえてくるのは自分の後ろからではなく前・・・つまり二階からだ。

「！！」

バットを握る手に力が入る。

（ここで振り回せんのかなぁ・・・）

後三段ぐらいで二階だ。

（よし！いくか！）

「ウォォォォォォ！」

「ぎゃあああぁ！？」

（人？）

「許してください。許してください。僕は何もしていない。だから・・・」

（この男はここの住人か？）

「おいあんた。」

「ひぃぃぃぃ！」

「いやひぃぃぃぃじゃなくてさ、あんたここの住人か？」

「え？普通の人か。よかった。ええそうです、ついさっきまでここで平凡に暮らしてました。」

「すまないな勝手に上がって。一応確認したんだがまだ人がいるなんて。」

「あ・・屋根裏部屋に隠れてたんです。窓の外を見たら変な奴があふれてたんで。」

（押し入られた形跡はなかったけどな・・・血痕もなかったし・・・まさか家族に置いてかれたのか？）

「あのそれでなんだが俺たち今日一日ここにかくまってくれないか？」

「いいですけど、俺たちって？」

「ああ、下で今女が風呂に入ってるんだがそいつは仲間なんだ。」

「仲間を組んで立ち向かっているんですか？」

目を輝かせて男は聞いてくる。

「まぁあそんなところだ。」

（大体はこっそりと動いてやり過ごしてるけどな・・・）

「ひとまずお礼をいっとくぜ。ありがとう。風呂まで勝手に借りちゃって。」

「別にいいんですが下にいても大丈夫なんですか？」

「ああ、たぶん大丈夫だ。窓の近くにはバリケードをつくったし、ドアの鍵もちゃんとしたしな。」

「ありがとうございます！これで心お気なくトイレに行ける。」

（そのために降りてきたのか。）

ダッダッダッ・・・・・

階段を降りて行った。

（さぁてッ布団でも取りに行くか。あ、布団使っていいか聞いてねぇや。まいいよな）

「きゃあああああ」

「ぎゃあああああ」

「ッ！？」

（出会ってしまったか、あの女と！）

「まずいぞ！」

「ぎゃあああ！助けてぇーこ…殺されるぅ～！」

降りてみると美咲が恐ろしい形相でバットを振り回している。

「お・・おい美咲！」

ブゥン！

（あ・・あぶねぇ！）

「おい聞けって！」

京谷もバットを振る。

バットとバットがぶつかり合った。

ゴォァ～ン

とても不思議な音が大音量で響き渡った。

手がびりびりする。

（美咲のやつなんて力でバットを振ってたんだ！？）

「こいつはここの住人だ！」

「二人で確認してた時は誰もいなかったじゃない！」

「屋根裏部屋に隠れてたんだとよ！大体「アレ」だったら叫び声なんてあげねぇだろ！」

「あ…それもそうね」

「まぁいい。俺は風呂に入るからちゃんと謝っとけよ。」

「う・・うん」

こうして一日目は何とか乗り切った京谷たちは、明日こそ中古車店へ行くと決意した。

ちなみに屋根裏部屋に隠れていた男は少し漏らしてしまった。

理由はもちろん美咲が濡れた髪を振り回し、鬼の形相でブンブンバットを振り回してきたからである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0485z/

パンデミック２

2011年12月2日21時56分発行